

2026年会優秀発表賞（富士電機賞）表彰報告

若手育成事業委員会

2026年 9月に行われた2026年会における研究成果発表の中から、優秀な発表を行った若手研究者・学生等に最優秀発表賞ならびに優秀発表賞（2026年富士電機賞）が授与されました。以下、報告します。

最優秀発表賞（3 件）

① ポスドクおよび博士課程学生の部

絹川 グリボスタン（東京大学）

受賞対象発表：「学校現場における気候変動適応の実態と課題」

② 修士課程（博士課程前期を含む）学生の部

山形 優斗（法政大学）

受賞対象発表：「数理最適化を用いた廃プラケミカルリサイクル施設の最適配置モデルの実証」

③ 学部学生・高専生・高校生等の部

梅川 明日香（熊本県立水俣高等学校）

受賞対象発表：「ポイ捨てゴミから排出される水銀の環境影響評価」

優秀発表賞（6 件）

① ポスドクおよび博士課程学生の部

須之内 朋哉（愛媛大学）

受賞対象発表：「養殖スマの筋肉組織に蓄積する水銀・PCBsレベルの変動要因～摂餌による解析～」

井藤 千聖（酪農学園大学）

受賞対象発表：「シラルトロ湖におけるLandsat-8・9の衛星画像を用いた浮葉植物植被面積の解析」

② 修士課程（博士課程前期を含む）学生の部

大浦 拓真（立命館大学）

受賞対象発表：「気候変動適応および人口動態変化を考慮した災害備蓄需要量の将来推計」

原 多輝（立命館大学）

受賞対象発表：「3Dコンクリートプリンティング住宅の脱炭素化ポテンシャル評価 ―木造軸組工法との比較ライフサイクルCO₂分析―」

③ 学部学生・高専生・高校生等の部

松井 珠慧（北九州市立大学）

受賞対象発表：「SROI（社会的投資収益率）を用いた自治体主導の家具リペア・リユース事業の社会的価値分析」

嘉糠 聡乃（名古屋大学）

受賞対象発表：「放置竹林問題を理解するための竹の存在量の可視化」

〔賞の創設ならびに受賞者選考・表彰経過〕

年会優秀発表賞（富士電機賞）は、環境科学分野の発展とその将来を担う創意ある若手研究者・学生等を育成・奨励することを目的として2008年に創設され、今年で18年目を迎えました。この趣旨にご賛同いただいている富士電機株式会社様に毎年ご寄付をいただき、年会優秀発表賞（富士電機賞）として表彰状ならびに副賞の授与を行っています。

年会において発表を行うポスドクから高校生までの若手会員を対象に公募を行い、年会講演要旨集および当日のポスター発表について、年会に参加した正会員による投票を行ったうえで、若手育成事業委員会年会優秀発表賞選考委員らによる厳正なる選考審査を行い、受賞者を決定しました。

2026年度は、ポスドクおよび博士課程学生の部、修士課程（博士課程前期を含む）学生の部、学部学生・高専生・高校生等の部のそれぞれから最優秀発表賞1件が選ばれました。さらに、優秀発表賞に計6件が選ばれました。年会中に開かれた表彰式では、荒巻俊也会長から受賞者一人ひとりに表彰状と副賞が授与され、会場から大きな祝福の拍手が湧き上がりました。



〔最優秀発表賞〕

受賞者氏名：絹川 グリボスタン（東京大学工学系研究科）

受賞対象発表：「学校現場における気候変動適応の実態と課題」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p. 64

発表要旨：

近年、気候変動に伴う猛暑や豪雨等の気象災害の頻発・激甚化により、学校現場では児童生徒の安全確保と教育活動の維持を両立することが重要な課題となっている。こうした影響は、熱中症リスクの増大にとどまらず、体育・部活動、水泳授業、屋外遊び、学校行事、登下校のほか、災害時の学校運営や防災対応など、学校生活の幅広い場面に及んでいる。実効的な適応を進めるためには、学校現場での対応のみならず、子供の生活を支える家庭や地域を含めて課題を捉える必要がある。本研究では、保護者を含む市民を対象とした全国規模の意識調査と、学校・園関係者へのヒアリング調査を通じて、気候変動に伴う影響と適応の実態を双方の視点から明らかにし、今後の学校における気候変動適応の課題と方向性を検討した。

全国調査は2025年3月に実施し、41,360件の有効解答のうち、高校生以下の子供と同居する6,184人を対象に分析した。その結果、猛暑によって学校でのプール活動や屋外スポーツ等の中止・延期が生じるとともに、家庭でも子供を外で遊ばせる機会が減少していた。特に、低年齢の子供ほど外遊びを控える傾向が強く、保護者からは熱中症や体調不良への不安に加え、登下校や学校行事、部活動等の安全確保、学校施設の暑熱対策、さらには将来の地球環境に対する懸念も示された。こうした暑熱による影響や不安がみられる中、家庭においても、冷感用品の利用や水分・塩分補給など、日常生活の中で様々な対策が講じられていた。

一方、学校・園関係者へのヒアリングからは、WBGT等の客観的指標に基づく活動制限、行事や水泳授業の実施時期の変更、屋内活動への転換、発達段階に応じた健康管理や教育など、子供の安全と活動機会を両立するための多様な適応策が確認された。また、豪雨等の気象災害に対しては、大雨警戒レベルや公共交通機関の運行状況を踏まえた早期判断、地域の地形リスクに応じた防災マニュアルの改訂等が行われていた。さらに、学校・園、保護者、行政間でICT等を活用した情報共有を進めるなど、組織間の連携を通じた対応も見られた。

以上から、学校における気候変動適応には、子供の安全を確保しながら健やかな成長に必要な活動機会を維持するとともに、気象災害への備えや家庭・地域との連携を含めた包括的な対応が求められる。一方、こうした取り組みの全国的な実施状況や地域・学校間の差、実践上の障壁は十分に明らかになっていない。今後は全国の学校を対象とした調査を通じてこれらを明らかにし、学校・家庭・地域が連携した持続的な気候変動適応のあり方を検討する。

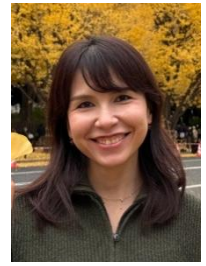
受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2026年会において最優秀発表賞という名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。発表の機会を設けてくださった環境科学会の関係者の皆様、この賞をご支援していただいている富士電機株式会社様、発表時に貴重なご意見・ご助言をくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

本研究では、猛暑や気象災害が深刻化する中で、子供たちの安全と学びをどのように守っていくのかという問題意識から、学校における気候変動適応について研究を進めてきました。学校における気候変動適応は、暑熱対策や防災、教育活動、施設設備、家庭との連携など幅広い課題に関わります。調査を進める中で、変化する気候の中でも、子供たちの学びや運動、自然体験など、健やかな成長に必要な活動機会をいかに確保していくかは重要であると同時に難しい課題であると感じました。

今回の発表では、多くの方からご質問やご意見をいただき、自分自身では気づかなかった視点から研究を見直す大変貴重な機会となりました。また、本研究を評価していただけたことを大変嬉しく思うと同時に、今後の研究への大きな励みとなりました。今後は、全国の学校を対象とした調査を進め、地域や学校による取り組みの違いや実践上の課題を明らかにし、子供の安全と豊かな活動機会を両立できる気候変動適応のあり方を検討していきたいと考えています。

最後になりましたが、本研究をご指導くださった栗栖聖先生をはじめ、福士謙介先生、都市サステイナビリティ学研究室の皆様に、心から感謝申し上げます。



絹川グリボスタン
(きぬがわ
ぐりぼすたん)
東京大学大学院
工学系研究科

〔最優秀発表賞〕

受賞者氏名：山形 優斗（法政大学大学院公共政策研究科サステイナビリティ学専攻）

受賞対象発表：「数理最適化を用いた廃プラケミカルリサイクル施設の最適配置モデルの実証」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p. 62

発表要旨：

プラスチックのリサイクルを促進するためには、処理拠点の集約化について検討しなければならない。期待されるのは規模の経済を働かせることであるが、先行する検討では、既存事業者の効率性を最大化することが目的であるかのような事例が散見される。本研究では、集約化による自治体の費用負担増を懸念事項として、経路依存性の制約に捉われない場合、「どの程度の施設集約化が全体最適となるか」を、数理最適化手法によって検討した。

最適配置の算出には混合整数計画法（MIP）を用いた。具体的には、ごみの排出拠点(I)、中間処理施設の候補地(J)、ケミカルリサイクル施設の候補地(R)、需要家であるエチレンプラント(C)に対し、ごみ排出量や各施設の建設・運営原単位などの入力変数を与え、サプライチェーン全体の総費用(輸送費＋施設費－売却益)を最小化する。モデルは平井ら(2023)による式を応用し、Pythonを用いて構築した。

分析対象地は神奈川県の2024年度単年度とし、既存の廃棄物処理施設が立地する場所をJ・Rの候補地として、県内の容器包装プラスチックを全量処理する条件で検証した。また、入力変数のうち、ケミカルリサイクル施設の建設・運転費用(固定費・変動費)に関しては、技術ノウハウを持つ実企業（社名非公表）の協力により得たデータを使用した。それ以外の入力変数については、環境省や神奈川県、県内各市区町村などの公的機関による、公開統計データを用いて導出した。シナリオは3×3の9つを用意した。

分析の結果、2シナリオにおいて事業の黒字化が確認された。施設数に関しては、中間処理施設の設置数はいずれのシナリオでも5カ所となった。一方、ケミカルリサイクル施設については、変換率が下がるほど施設数が増加し、分散型での配置が最適となる結果が得られた。配置の地理的傾向を見ると、集約型（変換率0.9）では川崎・横浜の臨海部（需要家近傍）に大規模施設が集中する一方、分散型（変換率0.7）では平塚など県域への中規模施設の分散が見られた。

以上の結果より、ケミカルリサイクル施設（R施設）の変換率が高い場合は「生成油の輸送」、低い場合は「選別後廃プラの輸送」が全体のボトルネックとなる。そのため、変換率の低下に伴い、R施設を分散配置して廃プラの輸送距離を短縮するネットワーク構造が全体最適となることが示された。また、全シナリオにおいて、自治体負担を含めた総費用は現行ルートにおける容器包装リサイクル協会の拠出額（約62億円/年）を下回った。拠出金には、自治体の収集・運搬等の負担は加味されていない。つまり、拡大生産者責任（EPR）に基づき特定事業者に費用負担を求めた場合、既存ルートより社会的コストを抑制できる可能性がある。

受賞者からの一言：

社会人大学院生として研究を始めて1年半、このような栄えある賞を頂戴し、感謝の念に堪えません。所属ゼミには「自明の理を疑い、証明を怠らない」という共通認識があります。フルタイムの仕事をこなした後にキャンパスへと向かう毎日は、いわば残業をしているようなものであり、体力的な限界を感じることも少なくありませんでした。しかし、これまでの実務の中で「これは自明の理だ」と言われてきたことに疑問を持ち、それを「現場知」に変換して研究活動にぶつけることができたからこそ、今回の結果に繋がったのだと考えております。必死に駆け抜けた日々が評価されたように感じられ、喜びもひとしおです。まだまだ道半ばの研究ですので、この賞を励みにさらなる発展と貢献を目指して邁進してまいります。

また、2026年大会は我が母校である法政大学が会場であり、日頃からご指導を仰いでいる杉野誠教授の前で授賞式を迎えることができました。さらに今大会は、昨年度でご退任された藤倉良名誉教授が学会賞を受賞された場でもありました。これ以上ないタイミングで受賞できたことは、私にとって何より嬉しい出来事です。そのほか、お忙しいなか発表を見守ってくださいましたゼミの先輩方もありがとうございました。この場をお借りして関係する皆様に御礼申し上げますとともに、これからもさらなる研究に励んでまいりますので、引き続きご指導のほどよろしくお願いいたします。



山形優斗
(やまがたゆうと)
法政大学大学院
公共政策研究科
サステイナビリティ学専攻

〔最優秀発表賞〕

受賞者氏名：梅川 明日香（熊本県立水俣高等学校）

受賞対象発表：「ポイ捨てゴミから排出される水銀の環境影響評価」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p.164

発表要旨：

ポイ捨てされる量が多い葉たばこの中には、微量ながら水銀が存在することが知られている。水銀の存在量はごくわずかであるが、大量に捨てられているため、自然環境中へ水銀が漏れ出ている可能性があると考えられる。そこで、捨てられたたばこの吸い殻から環境中に水銀が漏出されるか否かを調査し、漏出しているならば吸い殻による環境汚染の実態を明らかにし、その環境影響を多くの人に周知することを目的とした。

本研究では、水俣市内をゴミ拾いして拾ったたばこの吸い殻から揮発・溶出する水銀量を調べた。揮発の実験では、水銀濃度は一般大気濃度の $1.5\text{ng}/\text{m}^3$ より低かった。溶出の実験では、吸い殻を水につけると水銀が溶出することがわかった。この結果から水俣市内のポイ捨てタバコによる水銀溶出量の推計を行った。たばこの吸い殻1本当たりの平均重量は 0.40g であり、静置による溶出試験から、1本当たり約 0.265ng の水銀が溶出すると推測された。父が1週間に拾う吸い殻は約2,000本、年間では約104,000本であり、年間の水銀溶出量は約 $27.56\mu\text{g}$ と推計された。また、1週間に平均70km歩いて吸い殻を拾っていることから、道路1km当たり約28.57本の吸い殻が落ちていると推測され、1km当たり約 7.57ng の水銀が溶出すると考えられた。これを水俣市内の道路664kmに換算すると、年間約 $5.03\mu\text{g}$ の水銀が溶出すると推計された。さらに、水俣市の人口密度は $144\text{人}/\text{km}^2$ であるが、日本で最も人口密度の高い東京都豊島区では水俣市の161倍の $23,000\text{人}/\text{km}^2$ である。仮に同程度のたばこが捨てられているとすると、水銀溶出量もかなり多くなることが推測される。

これらのことから、ポイ捨てされたたばこの吸い殻から水銀が大気中に揮発する可能性は低いものの、水に濡れた場合には微量の水銀が周囲の水環境へ溶け出すことが明らかになった。このことから、道端や排水溝にポイ捨てされた吸い殻が、雨の日に溶け出した水とともに流れ出し、環境中に水銀が拡散していく可能性があると考えられる。また、調査を実施した水俣市は人口約2万人の小さな自治体であり、父が10年以上ごみ拾い活動を続けてなお、毎年コンスタントに10万本のたばこの吸い殻を拾っている状況である。つまり、ゴミ拾い活動が行われていない自治体で尚且つ大都市となれば、相当数のたばこの吸い殻が落ちていることは想像に難くない。

たばこの吸い殻は小さく目立たないごみだが、その量が多いことで環境に化学的な負荷を与える可能性がある。今回の研究結果は、吸い殻のポイ捨てが環境汚染につながる一つの要因となり得ることを示しており、地域でのごみ問題を考える上でも重要である。

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2026年会最優秀発表賞（富士電機賞）という名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。研究発表の機会を提供して下さった関係者様をはじめ、この賞をご支援していただいている富士電機株式会社様、当日の発表の際に貴重なご助言をくださいました皆様に、心より感謝申し上げます。

本研究では、ポイ捨てゴミから排出される水銀の環境影響評価をタバコの吸い殻を用いて行いました。先例の無い研究ではありましたがほとんど不安はなく、むしろワクワクした気持ちで実験を進めることができました。また、研究発表の際に他分野の専門家の方々から質問や感想をいただいたことで、新たな気づきや研究のさらなる可能性を感じることができました。学会に参加するのは初めての経験でしたが、様々な方と議論できたこと、異なる分野の研究に触れたことにより自分自身が大きく成長したと感じています。今回の受賞を励みに、これから様々なことに取り組んでいきます。また、本研究がポイ捨てゴミの物理的な環境影響だけでなく、「水銀」という観点による環境影響を周知し、ゴミのポイ捨てを減らすきっかけの一つになることを願っています。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり多大なるご指導を賜りました国立水俣病総合研究センターの丸本倍美先生、丸本幸治先生、水俣高等学校の柳生先生に改めて感謝申し上げます。



梅川 明日香
(うめかわ あすか)
熊本県立水俣高等学校

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：須之内 朋哉（愛媛大学大学院 沿岸環境科学研究センター）

受賞対象発表：「養殖スマの筋肉組織に蓄積する水銀・PCBsレベルの変動要因～摂餌による解析～」

発表掲載頁：環境科学会2026年会 講演要旨集、p. 133

受賞者からの一言：

この度は上記タイトルをポスター形式で発表し、優秀発表賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。研究発表のご機会を提供いただきました環境科学会関係者の皆様、ご審査していただきました先生方、富士電機株式会社の皆様に厚くお礼申し上げます。

現在、愛媛県ではクロマグロに変わる新たな養殖対象種としてスマを選定し、商業養殖への展開を促進しています。その中で本研究では、実際の販売において重要視されている消費者への安全性を評価するため国際社会で毒性が懸念されている水銀とPCBsの解析を実施しました。本研究ではこれまでの解析も含め、かなりの数のスマや餌飼料を分析しており、膨大な数のデータの管理及び解析にはかなり苦勞させられたことが印象的です。やはり相手が生物ということもあり、自身が予想していたものとは異なる結果が得られたことや解析し検体数が増えたことによる結果の変動などもあり、考察が複雑かつ難解で大変でした。しかし、これらの苦勞があったからこそ大変興味深い結果が得られ、今回の優秀発表賞に繋がったものと考えております。

今回の環境科学会でも私が取り組んでいる化学分析のみならず様々な内容の研究が多数発表されていたこと、大変楽しく・有意義な機会となりました。とくに高校生が地元の課題を解決するために様々な取り組みを行っていたことは大変興味深かったです。今後とも様々な内容を理解するためにも積極的に参加させていただきます。



須之内 朋哉
(すのうち ともや)
愛媛大学
沿岸環境科学研究
センター

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：井藤 千聖（酪農学園大学大学院酪農学研究科）

受賞対象発表：「シラルトロ湖におけるLandsat-8・9の衛星画像を用いた浮葉植物植被面積の解析」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p. 97

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2026年会において優秀発表賞（富士電機賞）という名誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。発表の機会を設けてくださった環境科学会の皆様、富士電機株式会社様、そして当日ご意見やご質問をお寄せくださった参加者の皆様に、心より御礼申し上げます。

本研究では、釧路湿原にあるシラルトロ湖を対象に、Landsat-8・9衛星画像を用いて浮葉植物ヒシ属の植被面積を解析しました。研究を進める上で最も苦勞した点は、衛星画像の前処理と分類条件の調整です。衛星ごとにバンド仕様が異なるため、同じ計算式でも正規化水指数（NDWI）値が変動し、年によって誤分類が増加する場面もありました。特に、水域と植生の判別が難しくなる画像への対応には多くの試行錯誤を要しましたが、UAV画像を基準とした比較により、安定した分類条件を設定することができました。

学会当日は、他の研究者の方々から衛星画像の扱い方や湖沼管理への応用可能性について質問をいただき、自分の研究がどのように社会的意義を持ち得るのかを改めて実感する機会となりました。また、ほかの衛星画像との比較解析や長期的な群落動態の評価など、今後の発展に向けた具体的な助言もいただき、研究の方向性がより明確になりました。

最後になりますが、本研究は吉田磨先生、山田浩之先生、尾山洋一博士をはじめ、共同研究者の皆様のご指導とご協力により成り立っております。今回の受賞を励みに、湖沼生態系の理解と保全に貢献できる研究をさらに進めてまいります。



井藤 千聖
(いとう ちさと)
酪農学園大学

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：大浦 拓真（立命館大学大学院理工学研究科）

受賞対象発表：「気候変動適応および人口動態変化を考慮した災害備蓄需要量の将来推計」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p. 35

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2026年会優秀発表賞（富士電機賞）をいただき、大変光栄に思います。研究発表の機会を設けてくださった環境科学会関係者の皆様、本賞をご支援いただいている富士電機株式会社様、そして当日の発表で貴重なご意見やご助言をくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

本研究では、気候変動による災害の激甚化や人口変化を踏まえ、地域ごとの将来の災害備蓄需要を推計し、防災効果だけでなく、備蓄の確保や更新に伴う環境負荷も考慮した備蓄方針の検討に取り組んでいます。研究を進める中では、災害、人口、環境という異なる要素をどのように一つの研究として整理するかに苦勞し、分析方法や研究の方向性について何度も悩みました。

そのたびに、指導教員の先生には、自分では気付けなかった課題を指摘していただくだけでなく、研究の目的や社会的な意味まで立ち返って考える機会を与えていただきました。また、研究室の先生方や先輩、同期の皆さんとの日々の議論や何気ない会話からも多くのヒントをいただき、研究を少しずつ形にすることができました。今回の受賞は、自分一人の力では決して得られなかったものだと感じています。

学会当日は、多くの方から研究に対する質問やご意見をいただき、自分の研究を新たな視点から見直す貴重な機会となりました。今回の受賞を励みに、いただいたご意見を今後の研究に生かし、より社会に役立つ研究へと発展させていきたいと思っています。最後になりますが、日頃よりご指導、ご支援くださっている先生方、研究室の皆様に改めて深く感謝申し上げます。



大浦拓真
(おおうらたくま)
立命館大学大学院
理工学研究科

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：原 多輝（立命館大学大学院理工学研究科）

受賞対象発表：「3Dコンクリートプリンティング住宅の脱炭素化ポテンシャル評価—木造軸組工法との比較ライフサイクルCO₂分析—」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p. 138

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2026年会優秀発表賞（富士電機賞）という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。研究発表の機会をご提供いただきました環境科学会関係者の皆様、本賞をご支援いただいている富士電機株式会社様、またポスター発表の際に貴重なご意見やご助言をくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

本研究では、3Dコンクリートプリンティング (3DCP) 住宅を対象に、木造軸組住宅とのライフサイクルCO₂比較を通じて、3DCPがより低炭素となる条件の明確化に取り組みました。3DCPは型枠削減や材料最適化などによる環境負荷低減が期待される一方、使用材料や断熱性能などの条件によって評価が大きく変わります。そこで、材料製造時のCO₂排出量や断熱性能を変化させながら比較することで、3DCPが木造住宅より低炭素となる条件を検討しました。

学会当日は、異なる専門分野の方々から多くの質問やご意見をいただき、自分の研究を別の視点から見直す貴重な機会となりました。特に、環境性能だけでなく、構造性能や実用性、社会実装まで含めて検討することの重要性を改めて認識しました。今回の受賞を励みに、今後は国内データの充実や分析条件の精緻化を進め、3DCP住宅の低炭素化と社会実装に貢献できる研究へと発展させていきたいと考えています。

最後になりますが、日頃よりご指導いただいている重富陽介先生をはじめ、研究室の皆様、研究を支えてくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



原多輝(はらたき)
立命館大学大学院
理工学研究科

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：松井 珠慧（北九州市立大学 国際環境工学部）

受賞対象発表：「SROI（社会的投資収益率）を用いた自治体主導の家具リペア・リユース事業の社会的価値分析」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p.170

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2026年会優秀発表賞（富士電機賞）という名誉ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。研究発表の機会を提供してくださった環境科学会関係者の皆様、ご協賛いただいた富士電機株式会社様、そして当日のポスター発表に際してご質問やご助言をくださいました皆様に、改めて深く御礼申し上げます。

本研究は、滋賀県が2025年度より実施している家具リペア・リユース事業を対象に、SROIを用いて事業が創出する社会的価値を定量的に評価しました。その結果、SROIは1を上回り、本事業が投入費用に対して同等以上の社会的価値を創出する可能性が示唆されました。今後は、現時点で定量化できていないアウトカムの把握・定量化と今後の事業実績の蓄積を踏まえた便益・費用推計の精密化、さらに他主体の寄与や事業を実施しなくても生じた効果などを考慮したSROI推計の精緻化に取り組みたいと考えております。

今回の学会は私自身初めての学会参加ということもあり、発表当日は緊張や不安が大きかったのですが、学会参加者の方々からいただいた助言や質問を通じて、自身の研究を改めて見つめ直し、研究をさらに深める貴重な機会となりました。このような賞をいただけたことを励みに、今後も研究に真摯に取り組んでまいります。最後になりますが、今回の研究を進めるにあたり多大なるご指導を頂いております松本亨教授、藤山淳史准教授をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



松井珠慧
(まついたまへ)
北九州市立大学
国際環境工学部

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：嘉糠 聡乃（名古屋大学情報学部自然情報学科）

受賞対象発表：「放置竹林問題を理解するための竹の存在量の可視化」

発表掲載頁：環境科学会2026年会講演集、p. 173

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2026年会優秀発表賞（富士電機賞）という大変名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。研究発表の機会を設けてくださった環境科学会の関係者様、富士電機株式会社様、そして会場にて本研究のポスター発表にお立ち寄りいただき貴重なご意見をくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

本研究は、竹の有効利用に向けた正確な資源量把握を目的とし、アロメトリー式による竹稈3Dモデルに実測した枝情報を組み込み、新たな竹稈3Dモデル、およびそれを適用した竹林モデルを作成しました。これにより、実際の竹林により近い地上部現存量の可視化を実現し、フィールド単位での竹の利用可能量を定量化しました。研究を進める過程で、実測により得られたデータが想定とは異なる傾向をしており、竹の構造について新たな気づきがあり、地道な実測の重要性を深く実感しました。得たデータをモデルに反映させる作業は容易ではなく、研究室の先輩や先生方からの温かいご助言に支えられ、最終的には形にすることが出来ました。

学会当日は参加者の方々と行った意見交換を通し、竹の具体的な利用方法についてお話を伺うとともに、今後直面すると考えられる課題についても考えを深めることが出来ました。今回の受賞を大きな励みとして、さらに研究を深めてまいります。

最後になりますが、日頃よりご指導くださっている長尾征洋准教授をはじめ、お力添えをいただいた研究室の皆様に心より感謝申し上げます。



嘉糠聡乃
(かぬかさとの)
名古屋大学
情報学部